

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる国語科授業づくり —「論理」を切り口としたカリキュラムの提案—

国語科研究部

はじめに

本校では、令和2年度から5年間に亘り、「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」を研究主題に掲げ、各教科において実践研究を進めてきた。本稿では、この5年間、国語部が積み重ねてきた実践研究について述べていく。

1 国語科における〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿

国語部では、令和2～4年度の実践研究を基に、国語科における「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿」を【表1】のように設定した。

【表1】本校の目指す子ども像と国語科が設定した「〈他者〉を楽しみ続ける姿」

本校の目指す姿	国語部が設定した「〈他者〉を楽しみ続ける姿」
A 〈他者〉に興味を持つ。	○ 〈他者〉（新たな教材等）との出会いに目が釘付けになったり、思いが声に出たりするなど、興味を示している姿。
B 〈他者〉を深く知ろうとする。	○ 「知りたい!」「考えたい!」「つくりたい!」など、〈他者〉との出会いを深め、自分のやりたいことが立ち上がっている姿。
C 〈他者〉と自己（あるいは自分の認識）とを比べ、自己（あるいは自分の認識）を深める。	○ 「その言葉でよいのか?」「違う表現はないか?」など、対象を表すのに、適した言葉を吟味している姿。
D A～Dを踏まえて、自己（あるいは自分の認識）を更新する。	○ 「考えが変わった!」「読みが深まった!」など、自分自身の変容や、学習の価値を実感している姿。

また、国語科における〈他者〉を次のようにした。

他者①：学習者が、教材を初めて読むとき、学習者にとってその内容が目新しかった場合、それは学習者にとっての〈他者〉と捉える。
他者②：授業によって初読の段階では気付かなかった教材の姿も〈他者〉と捉える。
他者③：自分とは違う「読み」を示す教室の中の友達もまた〈他者〉として捉える。

このように、国語科における「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの姿」とは、多様な〈他者〉に出会い、受容しながら学ぶ姿であると考えた。そして、〈他者〉を感じる学びの蓄積により、授業を離れても〈他者〉を求め、多様な〈他者〉に向き合おうとする姿を目指した。

2 授業づくりについて

(1) 「論理」を切り口とした国語科授業づくり

国語部では、〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成を目指して、「論理」を切り口とした研究を進めた。その際、難波（2018）による「論理」の定義をよりどころとし、

教材の叙述や筆者の思考、学習者の思考や判断の中にある「因果関係」を捉えながら、国語科授業づくりを深めていくこととした。そのための切り口として見出したのが、「対象の論理」と「主体の論理」である。本研究における「対象の論理」とはテキストに内在する論理、「主体の論理」とは学習者の思考における論理を指す。このように細分化した二つの「論理」を切り口として「読むこと」の授業研究を積み重ねた。

令和2～4年度の実践から、「対象の論理」と「主体の論理」の観点を取り入れることの効用を、「授業前」「授業中」「授業後」の三つの場面で、次のとおり整理した。

授業前：教材分析の際、テキスト内の論理構成の見える化によって、論理の飛躍や空白を明らかにし、授業で扱うポイントを見出すことができる。
授業中：学習者の意見を、「対象の論理」について語るものと「主体の論理」について語るものに棲み分けて整理することで、議論をより建設的なものへと高めることができる。
授業後：学習者分析の際、「対象の論理」について語るものと「主体の論理」について語るものにすみ分けて整理することで、より有効な指導方法を探ることができる。

これらのことから、授業者が、二つの論理を意図的に区別しながら、問いや課題をつくったり、児童の発言を聞き取ったりすることは、より説得力のある深い読みを実現し、〈他者〉性を立ち上げることに寄与すると考えた。

(2) 「論理」を切り口としたカリキュラムの提案

令和2～4年度までの実践研究を通して、学習者が発揮する力は、テキストとの出会いから受容の過程において活用するものであり、文種による隔たりがないと分かった。従来、国語科が扱う論理に関しては、説明的文章における実践での育成が通説とされてきたことを踏まえると、文学的文章における「論理」を用いた実践により、これまでとは異なる「論理」を用いた思考力・解釈の力を育むことができると考えた。

そこで、令和5年度には、これまでの国語科実践を踏まえ、文学的文章を「読むこと」の授業において、「論理」を扱うことで身に付けることができる能力の系統性を検討し、「対象の論理」と「主体の論理」という視座を用いたカリキュラムデザインを行った。このことで、二つの「論理」を生かす言語活動が設定され、この言語活動が単元を通して行われるという授業の組み方が、一つの形式として見出された。

令和6年度には、前年度の試案を見直し、「読みの目標」として、低学年では「自分に引き付けて読むことができる」、中学年では「他者を理解しようとしながら読むことができる」、高学年では「語り手を読むことができる」と設定し直した。この目標を達成するために、「読みの視点」として、低学年では『自分の視点』で読む、中学年では『複数の視点』で読む（相違に気付く）、高学年では『語り手の視点』で読む」と設定した。これらの系統性は、自己が認識する世界を自己中心的なものから次第に他者や社会へと拡張していくことを想定している。また、「対象の論理」と「主体の論理」を生かす言語活動やその活動を行っている際に、どのような「対象の論理」と「主体の論理」が生かされているかを踏まえ、より深い学びを引き出すことができる教材や実践の方法を探索することを目指した。以上のことを踏まえて実践を蓄積すること

で、「読みの目標」や「読みの視点」に照らし合わせ、単元の軸となる「対象の論理」、
「主体の論理」を引き出す手立て、「論理」を活用した単元の教材例、「論理」を生か
した言語活動例等を、次頁【表 2】のとおり整理することができた。

3 国語科におけるカリキュラムの連動と物語評価について

ここまで、「論理」を切り口とした授業づくりについて述べてきたが、「論理」を読
むことは、文学的文章を「読むこと」のみに留まらず、説明的文章や詩などの異なる
文種の記事を「読むこと」にも援用することができると考える。また、「論理」を読む
ことと他教科の学習との連動を図ることで、国語科の授業を離れても〈他者〉を求め、
多様な〈他者〉に向き合おうとする子どもを育成することができると考える。これら
のこと踏まえて、令和 6 年度に行った国語科の教科連動実践は、【表 3】のとおりであ
る。児童による物語評価（ヒロガルシートやヒロガルブック）の記述内容から、教科
連動を行うことで、〈他者〉との出会いが強化されたり、学びの意義を感じ、これから
も学んだことを使おうという意欲をもったりすることができると分かった。

【表 3】令和 6 年度の国語部におけるカリキュラムの連動

学年	教材名	連動教科	連動単元
1	くじらぐも（物語文）、空のぼうけん・いつまでもともだち（歌詞）	生活・音楽	あきのくも（生活）、合唱（音楽）
2	春の歌・冬眠（詩）	音楽・造形	抽象画の鑑賞
3	モチモチの木（物語文）	造形	「モチモチの木」の想像画
4	およぐ人（詩）／百人一首	体育／音楽	水泳／琴による音づくり
5	ハックルベリーの子で（歌詞）	音楽	合唱
6	「鳥獣戯画」を読む（説明文）	造形	「鳥獣戯画」「富嶽三十六景」鑑賞 砂絵「ドームがたり」鑑賞

おわりに

本稿では、〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育成する国語科授業づくりとして、「論
理」を切り口としたカリキュラムを提案した。本研究の成果は、「対象の論理」と「主
体の論理」を軸にして、児童の思考過程と授業方法・内容を整理できたことである。
今後の展望として、説明的文章や詩など異なる文種の記事を「読むこと」に援用する
際には、文種による差異を踏まえて、単元の軸となる「対象の論理」と「主体の論理」
を引き出す手立て、それぞれの「論理」の活用場面を検討する必要がある。また、他
領域の学習事項への援用の可能性や、他教科の学習との連動については、十分に検討
できていない。そのため、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習への援用や、学
校教育活動全体における位置づけも検討する必要がある。

今後も引き続き、「論理」を切り口としたカリキュラムのさらなる可能性を探り、〈他
者〉を楽しみ続ける子どもを育成する国語科授業を実践研究し続けていきたい。

（文責 中田 江美）

【引用参考文献】難波博孝（2018）『ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業』24-33. 明治図書

【表2】「論理」を切り口とした文学的文章を「読むこと」のカリキュラム

学年	目標	読みの視点	単元の軸となる「対象の論理」	「主体の論理」を引き出す手立て	「論理」を活用した単元の教材例	「論理」の観点を生かした言語活動の具体例	言語活動における「対象の論理」の活用例	言語活動における「主体の論理」の活用例
1	自分に引き付けて読むことができる。	「自分の視点」で読む。	単数の人物の論理 ・行動 ・心情 ・会話	【判断】 自分に引き付けて判断する。 ・自分だったらどうするか。 【評価】 自分に引き付けて評価する。 ・人物を評価する。 (人物の行動や状況) ・作品を評価する。 (好きなところ) ・自分の学びを評価する。	スイミー おとうとねずみチロ	「スイミーの『今日のあのね日記』を書く」 ・スイミーの動きや会話、その時の心情を再現するペープサート劇を行うとともに、場面ごとの日記を書いて交流することで、物語を体験的に読むことができるようにする。 「『おとうとねずみチロ』の音読劇をしよう」 ・「おとうとねずみチロ」の作品世界に浸り、チロの行動や心情を表現する音読劇を行うことで、物語を体験的に読むことができるようにする。	・ペープサートを使ってスイミーになりきり、見たものや考えたことを日記に書く。 ・チロの行動や心情を想像し、音読劇の工夫に生かす。	・ペープサートを使って、自分ならどんな動きをして、どんなことを話したかを表現する。 ・音読劇を観賞しあい、チロの行動や心情を捉え直す。
2	他者を理解しようとしながら読むことができる。	「複数の視点」で読む。(相互に気付く。)	複数の人物の論理 ・行動 ・心情 ・会話	【判断】 他者の状況を踏まえて判断する。 ・自分だったらどうするか。 【評価】 他者の状況を踏まえて評価する。 ・人物を評価する。 (人物同士の相互関係) ・作品を評価する。 (作品のもつ世界観) ・自分の学びを評価する。	ニャーゴ	「『ニャーゴ』の音読劇をしよう」 ・「ニャーゴ」の作品世界に浸り、たまやねずみたちの心情を表現する音読劇を行い、それぞれの場面での心情や人物による心情の違いを感じることができるようにする。	・たまやねずみたちの考えを踏まえ、音読劇の工夫に生かす。	・音読劇を観賞しあい、それぞれの登場人物の心情を捉え直す。
3					モチモチの木	「『豆太』についてプロフィールカードにまとめよう」 ・「モチモチの木」の豆太の行動や会話、様子についてプロフィールカードにまとめることで、中心人物だけでなく、じさまや語り手を含めた複数の視点で物語を読むことができるようにする。	・人物の行動、会話、様子から人物の性格について考え、プロフィールカードにまとめる。	・プロフィールカードを読み合い、人物に対する評価を捉え直す。
4					ごんぎつね 走れ	「『ごんぎつね』事件のホルターージュを書く」 ・「ごん(兵十)」役、記者役に分かれ、インタビュー活動を行いながら、「ごん」と「兵十」のすれ違いを読むことができるようにする。 「『のぶよのお悩み相談会を開こう』」 ・「のぶよ」役、親友役に分かれて、「のぶよ」の悩みを引き出しながら、悩み解決の道を探っていくことにより、「のぶよ」「お母ちゃん」「しんじ」のそれぞれの心情とその交差について考えることができるようにする。	・記者役の立場から、「ごん」役の言葉を引き出す。 ・「のぶよ」の親友役として、「のぶよ」の悩みを聞く。	・「ごん(兵十)」役になりきって、インタビューに答える。 ・「のぶよ」役になったり、その親友役になったりして、自分なりの悩みの解決方法を考える。
5	語り手を読むことができる。	語り手を読む。	語り手の論理 ・描写 ・語り手の背景	【判断】 語り手や背景を踏まえて判断する。 ・自分だったらどうするか。 【評価】 語り手や背景を踏まえて評価する。 ・人物を評価する。 (人物の生き方、ものの見方・考え方) ・作品を評価する。 (作品から広がる世界観、作品から受けるメッセージ) ・自分の学びを評価する。	たずねびと	「わたしと『ヒロシマ』についてまとめよう」 ・自分にとっての「ヒロシマ」を語るために、これまでの学びと「たずねびと」の中の人物の思いを読むことをつなぎ、自分の考えの再構築を行う。	・語り手を読む中で人物の心情や物語の世界を捉えることによって、自分はどう生きるかという考えにつなげる。	・物語の人物と自分を比べ、自分にとっての「ヒロシマ」についての考えをまとめる。
6					注文の多い料理店 ぼくのブックウーマン	「『注文の多い料理店』攻略マップを作ろう」 ・注文の多い料理店を俯瞰する攻略マップを作ることで、しんしたちが囁かれていく理由や、それを仕組む語り手の思惑について、考えることができるようにする。 「本の世界のこの人に出会いたいを語り合おう」 ・本の世界のこの人に出会いたいという気持ちを見つめるために、物語を読むことで、本を読むことによって広がる世界について考える。	・一つ一つの扉の言葉に翻弄されるしんしたちの判断と、それを支える根拠や理由付けについて考える。 ・物語の人物が読書に導かれる心情の変化を読む中で、人物の生き方やものの見方・考え方について考える。	・もし自分だったら、その扉を開けるかどうかという観点から検討する。 ・物語の人物と自分を比べ、自分の読書を捉えなおす。 (自分にとっての「この本のこの人とは？」についてまとめて、紹介する。)

